

# 重新走进人们视野的传统游戏



“哇，好难啊！”“哈哈，我也会做了！”

© 佐藤裕昭

近几年，越来越多的小学，在上综合课时，把附近的老年人请到课堂上，教学生们做传统游戏。也就是说，在教育第一线，正积极将孩子们的“游戏”融入到实际的教学中。其背景是儿童们的成长环境发生了变化。

儿童游戏，近二十年发生了很大的变化。而电子器具的快速普及是推动这种变化的根源。首先是在1983年，任天堂开发的使用电视屏幕的“家庭电子游戏机”面世之后，随即掀起了一股电子游戏的热潮。之后，便携式电子游戏机接连上市，电脑和手机的使用渐渐地让孩子们当中也开始普及。

根据“Benesse(贝乐思)”教育研究开发中心的调查<sup>\*</sup>，小学生放学后，人均花在电视游戏上的时间约为1小时。虽然基本上不玩电视游戏的小学生约占20%，但每天打游戏的时间超过2小时的小学生也超过20%。还仅是电视游戏，如果从玩电子游戏的时间整体来看，恐怕就不止这个数字了。同一调查显示，孩子们玩耍的地方，60%以上主要集中在自己家或是朋友家。玩耍的地方从户外迁移到了室内，这并不仅仅是电子游戏的影响。有人指出，由于以儿童为目标的犯罪增加以及城市开发等原因，可供孩子们放心玩耍的地方变少了。另外，还有小家庭造成的几代人之间的交流减少、社区功能弱化等原因。

这种儿童成长环境的变化，已经让人们感到了危机。户外活动的减少，造成了儿童体质和体力的下降。同时，单人玩耍的增多，也造成了儿童沟通能力的下降。

## 传统游戏的优点

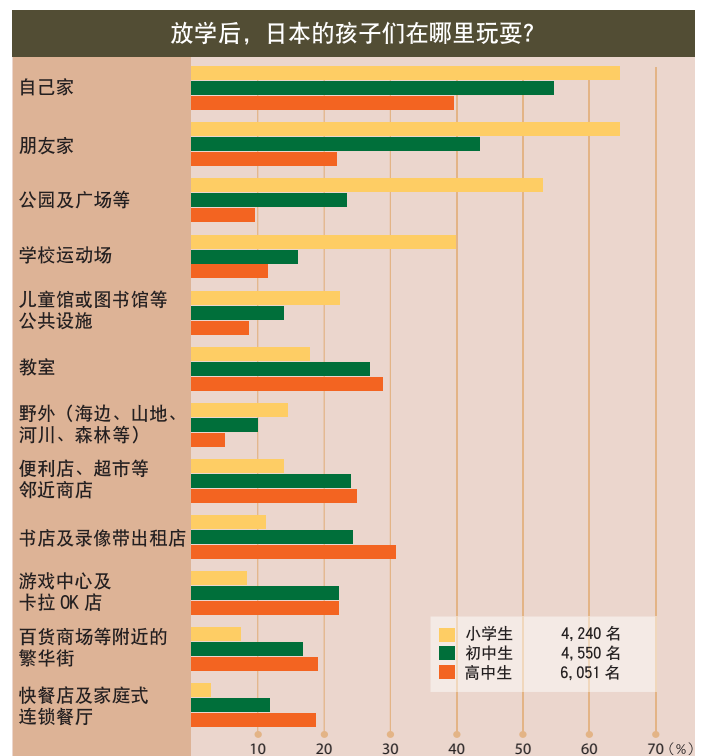
传统游戏中，有许多需要活动身体来做游戏，在玩耍中不知不觉地增强了体质，提高了耐力及注意力，培养了身体的平衡性。譬如，托球游戏，乍一看好像只有指尖儿用劲儿。其实，如果不能灵活地通过膝盖屈伸来保持身体的平衡，是很难做好的。同样，转陀螺也是这样，用绳子将陀螺绕紧，然后用劲甩出去使陀螺不停地旋转，或是让陀螺立在自己的手掌上绕圈，看似简单，但如果不下功夫长期练习的话，很难玩得地道。

同时，由于传统游戏不受年龄限制，将附近的老年人请到课堂上来，可以加强不同年龄段之间的人际交流，促进社区和谐。而且，为学生们创造与不同人群交流的机会，也是将传统游戏融入学校的目的之一。

为了给儿童创造能安心玩耍的场所和环境，引进传统游戏已成为许多地方政府及有关团体改善儿童生活环境的项目之一；许多社区还举办有关传统游戏的普及和竞技活动。但是，换一个角度来看，这意味着传统游戏已不是平时玩的游戏。传统游戏，本来是由祖辈传给父辈，再由父辈传给孩子，这样代代相传的。可是现在，由于小家庭逐渐增多，各种各样的玩具充斥街头巷尾，传统游戏逐渐淡出了人们的生活。尽管如此，简单质朴的传统玩具，有着电子游戏无法比拟的乐趣，有不少孩子都为此而着迷。

## 世界共通的传统游戏

托球、转陀螺、丢沙包、骑竹马、放风筝、翻绳等等，通常被说成是日本的传统游戏，很多孩子都以为是日本特有的游戏。其实，在世界各地都可以见到类似的玩具和游戏。这些游戏，有的是在一处形成然后又流传到各地，也有的则是碰巧在各地都有。因为这些儿童玩具都是用身边的材料制作的，所以，虽然材料不尽相同，但其形态和玩法世界各地都有相似之处，就没有什么让人不可思议的了。这些流传在世界各地、大致相同却又各有差异的传统玩具，将他们相互比较也是一件很有意思的事情吧。



<sup>\*</sup>《第1回子ども生活実態基本調査報告書》(第1次儿童生活实际状况基本调查报告书)(2005年7月刊行)

# だま けん玉 (托球)

托球有很多玩法，分大碟、中碟、小碟接球或用剑尖去接球（让剑尖插入球孔）。开始的时候，先练习用大碟接球；然后是中碟和小碟，等到可以用剑尖接住小球的时候，基本技巧就掌握得差不多了。接下来用各种接球方式的组合来培养技能。据说，有绝活儿的人很多，托球花样更达 1000 种以上。

据说，托球游戏起源于法国的“bilboquet（比尔伯格）”游戏。19 世纪从法国开始风靡整个欧洲。在法国，是贵族的成年人游戏；而在英国，主要是女孩子的游戏。

在日本，托球游戏一般被认为是在江户时代（1603-1867）从中国传到长崎的。当时，据说是一根直棒和一个小球的组合。到大正时代（1912-1926），在广岛，托球已经发展成类似现在的——三个碟子、剑尖和小球的组合了。渐渐地托球游戏在孩子们之间掀起了热潮，一直流行到昭和（1926-1989）初期。

为了普及托球游戏，1975 年日本成立了“日本けん玉協会”。统一了竞技用托球的规格（比赛时使用贴有公认标签的玩具），并制定了相关的比赛规则。现在，全国各地都举办托球比赛，评定托球技术的等级与段位（等级从 10 级到 1 级；段位从初段到 6 段）。

日本文部科学省也在关注日常生活中可以增强儿童体质的游戏。

托球游戏是需要腰、膝协调平衡的全身性运动，从 2007 年度开始，由擅长托球游戏的人们结成“巡演团”，在各地的小学中巡回宣传表演。

“日本けん玉協会（日本托球协会）”主页 <http://www.kendamakyokai.com/>



每年夏天进行的全日本少年托球冠军赛。从全国 10 个地区选拔出小学生男女各一名，以淘汰赛方式进行比赛。

©TJF

## 世界各国的托球



## 日本的托球



除图片 4 以外，本栏图片及说明均摘自《けん玉》(托球)(NPO 法人日本けん玉協会主编 / 丸石照机、铃木一郎、干叶雄司撰文 / 文溪堂发行 / ©NPO Japan Kendama Association, Teruki MARUISHI, Ichiro SUZUKI & Yuji CHIBA)。

# たけうま 竹馬 (高跷)

这是一种在 1 至 2 米的竹竿上固定踏板，脚踩在踏板上，用手抓住竹竿向前走的游戏。据说，竹马一词来源于中国旧时的一种把竹子当作马来骑的游戏。一般认为现存的竹马式样是在江户时代以后出现的。

现在，市面上流行的主要是塑料制的竹马。玩竹马可以培养平衡感觉，与独轮车等一起，成为小学和少年宫的游戏工具。有一些小学还举办竹马运动会。先让祖父、父亲、孩子三代人从截竹子开始共同制作竹马，然后在课堂上让学生们共同切磋玩竹马的技巧，最后在运动会上赛跑、接力等所有项目均使用竹马进行。



2007 年 1 月，京都府向日市工商业会举办的第 5 届日本全国竹马大会。会上还开办了家庭竹马教室。

©向日市商工会

## こま 独楽 / バイゴマ (陀螺 / 贝陀螺)

陀螺的种类很多。用手指尖转的“捻陀螺”，两只手转的“搓陀螺”，缠上绳子转的“绳提陀螺”和“甩陀螺”等等。作为传统游戏，更为人知的要数“甩陀螺”了。“甩陀螺”又分为木制的陀螺和铁制的贝陀螺等。

贝陀螺是没有芯轴的铁制陀螺，通常为双人游戏。玩法是在桶上面蒙上布，中间凹下去作为“场地”。用长度约60厘米的绳子缠在陀螺上，然后2人同时抛进“场地”旋转。2个陀螺相互碰撞，把对方的陀螺碰出场地者为胜。因为没有芯轴，很难将绳子紧紧地缠在陀螺上，要想玩得好就需要勤学苦练。

据说，陀螺是从中国传到日本的，不过具体的情形已很难考证。镰仓时代(1192-1333)流行于平民之间，最盛行的要数江户时代。众所周知的是在贝壳里填满沙或铅，然后用蜡封口做成的贝壳陀螺。这是贝陀螺的雏形。像现在这种用模具浇铸的铁制陀螺，是从明治末期到大正中期开始出现的。大正末期到昭和初期，刻有职业棒球选手或相扑选手名字的贝陀螺，在东京平民地区的孩子中广为流行。战争时期金属成为紧缺物资，陶瓷及玻璃等非铁制的贝陀螺成为主流。

战后，从昭和20年代到30年代后期，陀螺成为孩子们的主要游戏之一。制作陀螺的工厂也很多，而现在只有埼玉县的川口市还留下一处。尽管如此，现在仍有许多贝陀螺的爱好者，差不多每周都会在各地的公园等处举办各种大小的竞技活动。



(上) 刻有人名及地名的贝陀螺。(右) 在东京老城区举办的陀螺交流会。孩子们向大人请教玩贝陀螺的方法。(图片下端为正在“场地”里转着的陀螺)

©TJF



## 日本的陀螺



捻陀螺

搓陀螺



绳提陀螺



甩陀螺

© 独楽の里



2006年，由“全日本独楽回しの会”(全日本转陀螺会)主办的第7届全日本转陀螺大会。

## きょくごま 曲独楽 (杂技陀螺)

除了孩子们的玩具陀螺之外，还有用于杂技的陀螺。这种陀螺的颜色和式样都非常精美。使用这种陀螺，为观众表演各种各样的陀螺技巧。譬如，让陀螺在刀刃上边转边滑动，让陀螺像走钢丝一样地在细绳上移动，或在扇面上转动陀螺等等。每逢新年或喜庆的日子，杂技陀螺是人们助兴的常见节目之一。要学会这些技艺要花上好几年时间。



©TJF

## 推陈出新的现代版传统玩具

有些传统玩具，由玩具制造商根据现代儿童的喜好，做了相应的改良。譬如，在贝陀螺上装上电动设备的“バイブレード(爆转陀螺)”，使用了数码技术、会闪光及有音乐伴奏的“デジケン(数码托球)”等等。

这些现代版传统玩具的共同特点是与传统玩具相比，操作简单、容易，谁都可以马上学会。例如，装了电动设备的“バイブレード”，谁都可以让它简单地转起来。同时，常常与漫画、游戏、电视动画片等联合推出也是这些现代玩具的特征之一。就1999年推出的“バイブレード”而言，在产品上市的同期，漫画杂志刊载了以玩“バイブレード”的少年为主人公的漫画，电视播放了同一题材的动画片，这使“バイブレード”的人气骤增，仅2001年上半年销售量就达1500万个以上。

不过，这些现代版传统玩具的人气大多如昙花一现，缺乏持久性。“バイブレード”和“デジケン”已经停止生产。然而，由于“バイブレード”的流行，传统的贝陀螺又重新走进了人们的视野，玩贝陀螺的人数也增加了。现代版的传统玩具，不管是谁都不需要费多大力气就可以学会，这成为其流行的原因；不过，正因为如此，也给人们提供了重新评估传统玩具优点的机会。人们意识到，需要花费时间才可以掌握技巧的传统玩具，玩起来才更有成就感。



バイブレード

©HUDSON SOFT/TAKARA · バイブレードプロジェクト・テレビ東京



デジケン

本栏图片及说明均摘自《けん玉》(托球)(NPO法人日本托球协会主编/丸石照机、铃木一郎、干叶雄司撰文/文溪堂发行/©NPO Japan Kendama Association, Teruki MARUISHI, Ichiro SUZUKI & Yuji CHIBA)。©1998 TOMY

## てだま お手玉 (沙包)

沙包，就是把赤豆、大米等放入小布袋里缝制的小布包。基本玩法是和着歌曲的拍子，将几个沙包，一边抛一边接。在不同的地方，沙包的名称、里面装的东西、沙包的形状、玩法也会有所不同。

据说，丢沙包起源于公元前1200年左右居住在黑海附近游牧民族的游戏。后经由丝绸之路，传到世界各地。在日本，1200年前主要是女孩子的游戏，由母亲传给女儿，代代相传。到1970年前后，这种游戏慢慢退出了日常生活。最近，也还能常见到小沙包，不过已不是作为玩具而是作为装饰品。

### 日本の沙包



本栏图片及说明均摘自《お手玉》(沙包)(日本お手玉の会主编/大西传一郎撰文/文溪堂发行/©NIHON-NO-OTEDAMA-NO-KAI & Denichirou OHNISHI)。

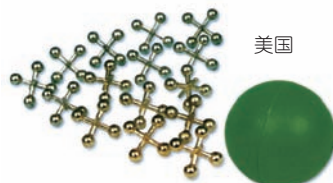
## 世界各国的沙包

澳大利亚



塑料球。里面装着鸟食(呈小米状)。

美国



8到15由金属制的“杰克”(类似陀螺的芯轴,有4根触角)和塑料球组成。

波多黎各



用毛线编织的东西。里面装着鸟食。

法国



用羊的踝骨当沙包。

## 托球游戏让我广交朋友

我是上大学以后才开始玩托球的。因为我的好朋友托球玩得非常好,不知不觉中我也加入了托球俱乐部“DAMA けん”。在那之前,对托球我连摸都没有摸过。在“DAMA けん”,我们常常应邀去当地的小学、少年宫、老年会、敬老院或国际交流会的会场去教托球游戏,表演托球技巧。像这样的活动,每年都有100多次。我们不管去哪儿,都会给人们送去欢乐。每当孩子们学会了一个新动作,惊呼“学会啦!”时的那种兴奋表情,总能让我感觉到参与其中的非凡价值和意义。

### 与蒙古进行交流

“DAMA けん”从2002年开始,每年春假,带着从熟人以及朋友那里募集到的约300个托球去蒙古进行交流。在蒙古,托球游戏也很流行,也有托球协会。除了“DAMA けん”,有很多组织和人员也去蒙古进行托球游戏的交流。DAMA けん开始去蒙古进行交流活动,也是通过大约从10年前就开始在蒙古教托球的人的介绍。

去年和今年我一共去了两次蒙古。我一点都不懂蒙古语,但是,看到我拿着托球,马上就有人问我“你会玩吗?表演一下吧”,这样,交流便开始了。今年,在乌兰巴托呆了约2周,在科布多呆了约1周。以这两个城市为中心,我们走访了附近城镇主要的小学和初中。在20几个地方举办了托球教室和表演活动,到场人数总共有2000人以上。也有一些地方因为每年都去,经常可以看到一些熟悉的面孔。虽然一年多没见,有很多孩子刚招呼一声,就迫不及待地要跟我比试。“你看你看,这个你会吗?”有些孩子做得非常好,常常让我自叹不如,同时也让我感到由衷地高兴。

在蒙古,我们得到了很多人的帮助。今年,在乌兰巴托,我们“DAMA けん”的成员住在当地一位有名的马头琴演奏者的家中。那位先生特地为我们演奏了马头琴,琴声婉转动听,犹如天籁。而且,每年都有学习日语的大学生负责接送、做翻译、照料我们的生活。记得第一次去蒙古时,一位总是帮助我们的大学生卓黎果说“我想让你们了解,你们做的是非常有意义的事,所以我愿意帮助你们。”他的话让我感触很深。有这么多支持我们、帮助我们的人,就意味着我们决不能辜负他们的期望,不能敷衍了事,应该认真、负责地开展交流活动。

### 发现一个崭新的“自我”

在加入“DAMA けん”之前,我最怕和孩子一起玩儿。但是,一

玩起托球来,自然而然地就能融入孩子们中间。我发现一个与孩子们愉快游戏的新的自我。

以前的我是个胆怯、怕紧张的人。随着在众人面前说话和表演托球机会的增多,特别是今年一年,成了“DAMA けん”的代表,比以前稍微强了一些。开始的时候,常会因为紧张而表演失败,越紧张就越做不好。但是,随着出场次数的增加,即便是失手,也能沉得住气,不那么手忙脚乱了。同时,学会了根据孩子们的表情和状态,穿插一些休息时间,或用表演技巧集中孩子们的注意力,随机应变地合理安排活动。这样一来,自己也慢慢地增强了信心。

### 托球游戏的魅力

和高中时的朋友谈起加入托球俱乐部的事,他们都觉得难以置信“什么?吃多啦……?”刚开始的时候,我也有过“都大学生了还玩什么托球?”的害羞想法。不过现在已经完全没有这种感觉了。现在遇到这种情况,我会反客为主地建议说“你也不妨试试吧”。

托球游戏的魅力在于什么人都可以玩。玩托球没有年龄和性别限制,也不论你的运动神经是否发达。也不是跑得快的人玩得就一定好。只要愿意谁都可以玩。虽然技巧会有高低之分,可是这个几率对谁都是公平的。在练习上下多大工夫就有多大收获。只要坚持练习,不会的技巧,会在某一天突然地就掌握了。那时候的喜悦是不加一点儿水份的。实实在在地学会了、掌握了,不由得让人感到一种成就感。这也是托球游戏的魅力所在吧。

对于孩子们,与电子游戏相比,我更希望他们加入到托球游戏的队伍中。我小时候是典型的游戏机少年。电子游戏,因为一起玩的人数有限,所以既不热闹,又没有什么拓展。而托球游戏一个人能玩,多数人也能玩,既可以相互切磋技巧,也可以比较胜负,人数再多也毫无妨碍,很有拓展前途。

### 今后的目标

“DAMA けん”的目标是在大学所在地进一步推广和普及托球游戏。因为托球游戏不坚持练习就很难熟练掌握,为此,“DAMA けん”从今年开始还在公民馆租借了一间活动室,开设了“DAMA 道場”,一个月上2次课。现已有十五、六个学员。

托球游戏可以给各个年龄段的人们送来欢笑,愿它能得到更加广泛的推广和普及。

(本文为“人物采访”的中文版)



## けん玉で広がった人との出会い

### たりのお

大学3年。広島県在住。

ぼくがけん玉を始めたのは、大学に入ってからです。仲良くなった友達がたまたまけん玉が上手だったこともあって、気づいたらDAMA けんに入っていました。それまでは、けん玉にさわったことすらありませんでした。DAMA けんでは、依頼を受けて、地元の小学校や児童館、老人会や老人ホーム、国際交流のイベントなどでけん玉を教えたり、技を披露したりしています。そういった活動が年間100回ぐらいになります。訪れる先々で、たくさんの人たちが喜んでくれます。できなかった技ができたとき、子どもたちが「できた!」と目を輝かせて喜びます。そんな子どもたちの姿を見ると、自分が人の役に立っていることを実感できるんです。

### モンゴルでの交流

DAMA けんでは、2002年から毎年春休みに、知り合いからもらったけん玉を300本ほど持ってモンゴルに行き、交流を行っています。実はモンゴルでは、けん玉はかなり知られています。けん玉協会もあります。DAMA けん以外にも、モンゴルでけん玉の交流を行っている人やグループがけっこうあるんです。DAMA けんがモンゴルに行くようになったのも、10年ほど前からモンゴルでけん玉を教えている人に紹介されたからなんです。

ぼくは去年と今年の2回行きました。モンゴルのことばは全然わかりません。でも、けん玉をもっていると、「お前、けん玉できるのか? 見せてくれ」と向こうから話しかけてきて、すぐに交流が始まります。

はじめまして、たりおです。ぼくが所属しているけん玉同好会「DAMA けん」では、地元の子どもたちにけん玉を教えたり、イベントでけん玉の技を披露したりするほか、年に1回、モンゴルにけん玉交流に出かけます。ぼくは昨年代表を務めました。

今年は、ウランバートル<sup>1</sup>に約2週間、ホブド<sup>2</sup>に約1週間滞在しました。ウランバートルとホブドを拠点にして、近隣の町の主に小学校や中学校を訪ねました。20ヵ所以上で開いたけん玉教室や大会に、2,000人以上が来てくれました。毎年行っているところがあるので、懐かしい顔もたくさんあります。1年ぶりに会うと、あいさつもそこそこに、「見て見て! この技できる?」と挑戦してくる子がたくさんいます。上手い子にはぼくも勝てません。でも、それもまた嬉しいんです。

モンゴルでは、多くの人たちがぼくたちを手伝ってくれます。今年、ウランバートルでは、有名な馬頭琴奏者の方の家にDAMA けんのメンバーみんなを泊めてもらいました。その方が弾いてくれた馬頭琴は、今までに聞いたこともないような美しい音色でした。また、毎年、日本語を勉強している大学生が車を出してくれたり、通訳してくれたりして、ぼくたちの世話をしてくれます。初めてモンゴルに行ったとき、いつも手伝ってくれる大学生の一人、ゾリゴーが言った「君たちはいいことをしているから、ぼくも手伝っている。それはわかってほしい」ということばに考えさせられました。手伝ってくれる人、応援してくれる人がいるということは、その人たちの期待に応えなければならないということ、いい加減なことではできない、責任と自覚をもって行動しなければならないと強く思ったのです。

### 新しい自分を発見



モンゴルの人たちにけん玉を贈呈。

© DAMAけん



モンゴルの子どもたちにけん玉を教える。

© DAMAけん



大学祭で開いたけん玉コーナー。全く初めて見る人もいれば、似たような遊びをしたことがある人もいます。 © DAMAけん



地元の小学校の教室で。授業の一環として依頼されることもある。 © DAMAけん

DAMA けんに入るまで、子どもたちと遊ぶのは苦手でした。でも、けん玉をもっていると、すんなり子どもたちの中に入っていけるんです。子どもたちと遊ぶのを楽しんでいる新しい自分を発見しました。

それから、以前はプレッシャーに弱かったり、気が弱いところがあったりしたのですが、人前で話したり技を見せたりする機会が多いことと、昨年一年間、DAMA けんの代表をやったこともあって、少し強くなりました。最初の頃は、緊張して技を失敗したりすると、あせって余計できなくなったりということがありました。でも、場数を踏むにつれて、技を失敗したとしてもあせらないでできるようになりました。また、子どもたちの表情や様子を見ながら、休憩を入れたり、自分が技を見せて集中させたり、そういったことを臨機応変にできるようにになりました。それがまた自信につながっていきました。

### けん玉の魅力

けん玉のサークルに入っていると、高校時代の友達からは「は～？ 何やってんの～？」と呆れられることが多くて、最初は、大学生にもなってけん玉をやっているのがちょっと恥ずかしい気持ちもありましたが、今はもう全くないです。友達に言われても、「お前もやってみるか！」と言います。

けん玉の魅力は何といっても、やる人を選ばないことです。年齢

も性別も関係ないし、運動神経がいい、悪いも関係ない。足が速い人が上手いわけでもない。誰でもできるんです。人によって上手い下手はあるけれど、誰にも平等だと思います。やればやっただけ上手になるんです。練習していると、できなかったことがある日突然できるようになるんです。そのときは、単純に嬉しいです。できたというのがはっきりわかるので、達成感を得やすいんです。それもけん玉の魅力です。

子どもたちにもデジタルゲームよりもけん玉をやってほしいなあと、思います。ぼくは小さいころ、ゲーム少年でした。デジタルゲームだと、限られた人数でしか遊べないので、楽しくないし、広がりがないと思うんです。けん玉だとひとりでもできるし、技を見せ合ったり、勝負したりして、何人でもできるから、広がりがあります。

### 今後の目標

DAMA けんの目標は、大学の地元であるこの地域でもっともつとけん玉を普及させることです。けん玉は継続しないと上手にならないので、今年から、「DAMA 道場」を開きました。公民館の一室を借りて、月に2回教えています。今は、15、6人が通っています。

子どもからお年寄りまで楽しめるけん玉がもっともつと広まればいいなあと、思います。



- 1 モンゴル共和国の首都。標高約1,300メートルに位置する。人口は約100万人。
- 2 ウランバートルから西へ1425km。飛行機で3時間、車では2泊3日。面積76100平方キロメートル、北海道と同じくらい。南は中国に接している。気温は最高38℃、最低-43℃。人口9万人。家畜約132万頭。

### 雑学博士：何を踏む？

文中に、「場数を踏む」という表現が出てきます。「踏む」を使った慣用句はほかにもいくつかあります。( )には【 】のいずれかが入ります。何が入るのか想像してみましょう。

- ① ( ) を踏む：どうしようかと迷うこと。ためらうこと。
- ② ( ) を踏む：ひどく怒ったり悔しがったりすること。
- ③ ( ) を踏む：危険な状況に臨むこと。
- ④ ( ) を踏む：前の者と同じ失敗をすること。
- ⑤ ( ) を踏む：世間に出て苦労すること。
- ⑥ ( ) を踏む：きわめて危険なこと。

【地団駄、二の足、塩、前轍、虎の尾、薄氷】

正解はウェブに掲載しています (http://www.tjf.or.jp/hidamari/)。